

信州の植物研究家

山 崎 林 治

このことについて私が特に手がけているわけではない。第一回の例会の時、年のこうということでしょうか、この会の皮切りをするように題目をきめて指示があったので、取敢えずまとめてみたにすぎない。したがって比較的新しいところだけ、之れもアウトラインにすぎない結果となった。故人について、生年月日の早い人から並べたので、これがもとになってさらに追加して完成する資料の一端ともなれば幸である。

田中 芳男 1838-1916

飯田の人。帝口学士院会員、貴族員議員などで男爵を授けている。その著書に次のようなものがある。

有用植物図説 1886

日本有用植物誌 1895

また学名に氏の名のついたものに、

Vicia Tanakae Franch. et Sav. オオバクサフジ

Loranthus Tanakae Franch. et Sav. ホザキノヤドリギ

Carum Tanakae Franch. et Sav. イワセントウソウ

など沢山あるが、特筆すべきは、1873年にてた、Francher, Savatier. 共著の日本植物目録に、タデスミレ *V. thibaudieri* Franch. et Sav. が記載されていて、ここに田中芳男氏が信濃にて採集、と記されていることである。

矢田部良吉 1851-1899

静岡県の人。東京大学の初代植物学教授でのち東京高師の校長をつとめている。本県人でないのにここにあげたのは、次のようなことがあるからである。

1884年にトガクシショウマを見つけて、1888年に *Yatabea japonica* Makino (和名トガクシショウマ) と発表されたが、すでに伊藤篤太郎氏が *Ranzania japonica* Ito (和名トガクシソウ) と発表されてあったことがわかって、学名はこれが採用されているが、和名はトガクシショウマと呼ばれている。この植物についてはのちに矢沢米三郎氏のところで述べる。

斉田功太郎 1859-1923

松代の人、東京大学で矢田部氏に学び、のち東京高師の教授をつとめた。之の著書の一部に次のようなものがある。

内外植物誌 (佐藤礼介氏と共著) 1917

大日本普通植物誌 1897

内外実用植物図説 1907

また学名に氏の名のついているものに

Salix saidaeana Seen. ヤマヤナギ

Hypnea saidana Halmes サイダイバラノリ

などである。

河野 齡蔵 1865-1939

松本市犬飼新田に生れ、のち松本田町に新居をかまえ、その庭園にすばらしいロックガーデンを築いて高山植物をたくさん培養していた。はじめ長野の尋常師範を終えて、文部省の検定試験に合格し、長野師範、松本女子師範のほか校長として県下各地を歴任した。1924年に引退すると同時に旧制松本第二中学校に嘱託となり、1931年までつとめた。そのあと1933年とその次の年の二回、信濃教育会から派遣されてカラフトや千島の植物研究をしている。これより先1893年に矢沢米三郎氏らと共に乗鞍登山をしたことにはじまって、日本アルプス登山の先鞭をきった。その内1898年の白馬登山の記事は雑誌信濃教育153に掲載された。また絵をよくかき、高山植物の絵は今でも県内に沢山残っている。その著「高山植物図説」(1931)の絵は自筆によるものである。このほか著書としては、

高山植物の研究 1917

日本アルプス登山案内 (矢沢米三郎氏と共著) 1917

高山研究 1927

高山植物の培養 1934

などがあり、学名に氏の名のついているものに

Chrysanthemum konoeanum - Makino トガクシギク

があって、イワインテンとリュウノウギクの間種というものである。なお、東久邇宮、朝香宮などの日本アルプス登山の御案内もしたことがある。

矢沢米三郎 1868-1942

諏訪中洲の人。長野の尋常師範から東京高師に学び、母校につとめたが再び東京高師研究科にす

すみ、これを終えてまた長野師範に帰った（1900年）。

1905年松本女子師範創立と同時に校長となり、1924年長崎師範に転任させられたが、間もなく引退した。

早くから河野齡蔵氏らと一緒に日本アルプスの登山を試み、とくに昆虫研究の業績が多い。信濃山岳会や信濃生物学会の産みの親であり、同会長もつとめた。のちに信濃博物会（今の信濃生物会）の創設にもあずかり、その初代の会長もつとめた。

著書には昆虫生態学、鳥獣虫魚、留鳥など動物関係のものほかに、次のようなものがある。

日本アルプス登山案内（河野齡蔵氏と共著）1917

上高地 1928

日本アルプスの研究 1935

また学名に氏の名のでているものには、

Viola Yazawana Makino ヒメスミレサイシン

Spiraea Yazawai Makino アイズシモツケ

などがあり、1902年に東宮殿下が長野師範御視察の際トガクシシ ヲウマを献上し、そののちこれを記念してこの花が長野師範の校章に取り入れられた。今も信州大学附属長野中学校の校章になっている。なお、秩父宮、澄宮、久邇宮、山階宮などの日本アルプス登山の御案内役もつとめた。

白沢 保美 1868-1947

南安曇郡三郷村明盛の出身。農林省試験場長、林学会長などをつとめ、その著に次のようなものがある。

日本森林図譜 上巻 1905

日本森林図譜 下巻 1910

日本竹類図譜 1912

また、学名に氏の名のでているものに、

Picea Shirasawai Hayashi ヒメマツハダ

Acer Shirasawanum Koidz. オオイタヤメイゲツ

などがある。またヤツガタクトウヒの命名者でもある。（小山光男氏記事参照）

小山海太郎 1870-1953

小泉郡和（かのう）の人。西ヶ原農事試験場に学び、文部省検定試験合格者である。旧制野沢中学に22年間つとめ、長野商業に転じた。昆虫、鳥類などに詳しく、著書はその方面のものばかりである。1910年に岩村田上ノ城の洞窟から生徒がとってきた光る土について調べ、これを三好

学博士に送ったが、これで日本にはじめてヒカリゴケのあることがわかった。また、小諸市味噌塚のテングノムギメシも氏の発見であるという。いずれも国の天然記念物に指定されている。

岡田 武松 1874-1918

下伊那郡喬木村の生れ。長野師範で矢沢米三郎氏に師事し、文部省検定試験合格者である。長野師範、旧制飯田中学、旧制松本高等女学校など歴任した。1897年ごろからアルプス登山をはじめ、南アルプスなどにも登った。

大正年間に白馬登山の話が小学校の教材となって国語教科書にのっていたが、これは1898年に河野齡蔵氏らと共にした白馬登山記の一部だという。

長谷川 五作 1880-1963

松代の人。長野師範第二種講習を終えて、文部省検定試験合格者である。更埴地方の植物調査をし、松代地蔵峠でウスギタンボポを見出した。主な業績は動植物の交配実験で、当時まだ遺伝学が普及していなくて、その殆んどは追試に終わったが、これらの実物標本を示して啓蒙につとめた功績は大きい。そのころ信濃教育会が理科教科書の改定をして、全国にさきかけて遺伝教材を取り入れ中央の学者の眼をひいたものであるが、これは氏の主張によったものである。また、今盛んになった県産業の一つエノキダケの栽培についてその基礎をつくったのは氏の力である。エノキダケの組合は、その功を讃えて、氏の菩提寺、松代長国寺の庭に胸像をたてている。

田中 真一 1881-1965

東筑摩郡広丘の人。長野師範に学び、当時すでに次の二書を著している。

信濃の花 1903

花物語 1903

卒業後一度は小学校につとめたが、まもなく牧野富太郎氏の紹介で池野成一郎博士のもとに8年間助手をつとめた。1913年にこゝを辞して、帝国駒場農園を設立し、農産物種子の検査、苗木の育成販売などをし、1916年から牧野富太郎博士の日本植物図鑑の編集を手伝った。上京前に県下各地の山を歩き、いくつもの植物を発見しているが、そのうち1903年に白馬岳で採集したクモイナズナには、*Arabis Tanakana Makino* の学名がついている。また前記著書のほか次のものがある。

科属検索日本植物誌（牧野富太郎氏共著）1928

千野 光茂 1882-1957

上諏訪の人。旧制諏訪中学校卒業後一年志願兵となって、のちに陸軍中尉となっている。兵役を終えてすぐに文部省検定試験に合格し、旧制諏訪高等女学校につとめた。研究の主は昆虫と遺伝学であるが、植物や地質にも詳しく、1948年遺伝学雑誌に「スミレ属二種間雑種」を発表した。その一つが氏の発見したスワキクバスミレである。生物教育に実験を重要視し、常に実験材料を郷土のものに求め、松本高等学校の実験講座を受けもったこともある。1948年ごろから郷土の材料クロシ・ウジ・ウバエの遺伝研究をはじめ、餌料も日本独自のものを工夫している。これが認められ1925年には駒井卓博士にむかえられて、京都大学でシ・ウジ・ウバエの遺伝研究に専念するようになった。その後数々の業績をつんで学位を得た。著書にもこれに関するものがある。1927年から諏訪清陵高校の校長となり、信濃教育会長、信濃生物会長などもつとめた。

横沢 末木 1883-1959

小県郡本原の人。川中島に生れ、長野師範第一種講習を終了、小学校につとめたが、1924年から1946年まで22年間旧制上田中学校につとめた。佐久ことに小県の植物研究に詳しく、三好学博士と親交があって、早くからこの地方に国の天然記念物が指定されたのはこのためである。

小山 光男 1885-1935

埴科郡寺尾の生れ。農業大学の実科を終えて、こゝで助手をつとめた。1913年に八ヶ岳で、ヤツガタクトウヒを発見し、白沢保美氏が、*Picea Koyamai Shirasawa*と発表した。

小泉 秀雄 1886-1945

山形県の出身で、小泉源一博士の令弟である。1921年に矢沢米三郎氏に招かれて、松本女子師範に1932年まで11年間つとめた。この間県下あまねく植物研究に歩き、数々の発見をされたが、その一部が長野県史蹟名勝天然記念物報告書にみられる。

また氏の著作として

上伊那郡植物誌 1930

下伊那郡植物調査 1930

などのほかに、のちに横内斎氏によってまとめられた。

日本南アルプス寒地植物誌 1959

などがある。なお学名に氏の名のあるものに

Helictotrichon hideoi Ohwi ミサヤマチヤヒキ

Carex hideoi Ohwi センジョウスゲ

などがある。

飛田 広 1897-1947

茨城県出身。茨城師範から東京高師の第一臨教を終えて、1925年から1942年まで17年間旧制諏訪中学校につとめた。この間主に霧ヶ峯や諏訪神社上社の植物調査に没頭した。雑誌信濃教育に「官弊大社諏訪神社上社々叢」(1934年)が発表され、ほかに次の著書がある。

霧ヶ峯の植物(本田正次氏と共著)1941

また、八ヶ岳で発見したクモイヒョウタンボクには、当時 *Lonicera Tobitai Nakai* となっていた。

随想 — 植物と昆虫、植物採集など

清 沢 晴 親

(その1) 植物と昆虫について

1. 昆虫の栄養源としての植物

昆虫の既知の種は世界に685,900種(Sabrosky 1953)といわれ、これらの栄養源は直接間接植物の光合成によったものに依存しているといつてよい。この点、昆虫は植物にとっては大害虫である。なかでも食植性の昆虫は、その食性によって食害植物の撰択をおこない、また食害する部分も花、果実、葉、茎、根等のさまざまである。それ故に一般的には異種類の昆虫が同時に同一部分を競って食害するようなことは割合に少なく、自ら自然界のバランスは保たれているようである。この結果は、常夏の地方では同一植物に多く寄食するが、温帯以北では同一植物に寄食する種類が減少することとなる。なぜならば昆虫および植物の生育期間の長短の相異があるからである。

2. 花粉の媒介

虫媒花植物中には花粉花と花蜜花がある。前者は蜜の分泌はないがいちじるしい花粉をもつ(ボタン、ジャクヤク)。これらは、花粉を食う昆虫、たとえばコガネムシ類(ハナムグリ)の来訪により受粉される。後者は蜜を分泌するので吸蜜性の昆虫(チョウ、ガ、ハチ、ハエの類)が訪れて受粉させる。また、昆虫の種類(ミツバチ、ハキリバチ等)によっては吸蜜に加えて、花粉を幼虫の食料として運搬するものもある。これにともなう、植物の側では花形、花色、香、花粉の形態、開花時刻等により昆虫の種類をある程度選択し、一方、昆虫の側では季節によって訪問花を変えていく傾向が強いが、これらの具体的な関係は地域によってかならずしも厳密では